

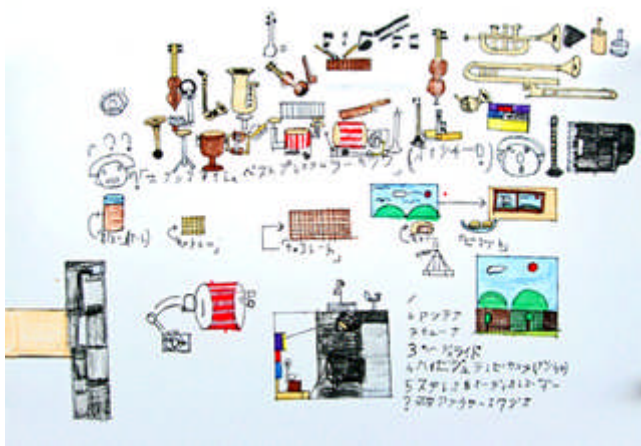
尾崎翔悟「シヲ シフォーニバレト・ミュージク」 Contemporary Art Brut vol.6

2011/12/06(tue) - 12/25(sun)

尾崎翔悟が取り上げられました

アール・ブリュットに熱視線 障害者アート「純粋に楽しんで」

朝日新聞首都圏版 12月18日掲載



オリジナルバージョン 2011 画用紙・ペン・色鉛筆 191×272mm

見れば見るほど難解な絵である。日常生活で目にする様々な物体を羅列して描いた絵は、障害のある人の創作アトリエではよく見られる典型的なスタイルだ。だが尾崎翔悟の場合は、描かれたものについて考えれば考えるほど、絵のことが分からなくなってくる。

試みに、上の作品のモチーフを書き出してみよう。ヴァイオリンかチェロ、トランペット、ドラムセット、ピアノなどの楽器類と音符が上部を占める。そこに人の顔が二つ。カフェオレやキャラメルなどの飲食物。バスドラムを打つ時の構造図。この辺りから、私はすでに不安でいっぱいだ。放送スタジオの図解と風景画、それは確かか。そして、左側の黒と薄い橙色の大きな図形で不安は頂点に達する。これは一体何だ。

そもそも、初めから奇妙だった。楽器類の中央、最も目立つ場所がなぜか空白のようで、しかしよく見るとフルートのような形がうっすらと浮かんでいる。なぜこの重要な場所を占拠するモチーフだけが消えかかっているのか。「キャラメル」と「チョコレート」も、文字のせいで納得したつもりでいたが、「チョコレート」はともかく「キャラメル」が板状になっているのはなぜだ。隣の風景画はさらに謎が深い。二つの山の上に雲と太陽、今や自明と思えるものすら自信をもって断言できない。その二つの山が、矢印で示された右側の場面ではなぜか茶色の枠で分割されている。その下では、この二つが再び統合され、山の下にはフェンスと木立が加えられている。いや、私がフェンスと呼んだものは「チョコレート」なのかもしれない。

もうやめよう。頭がくらくらしてきた。尾崎翔悟は関係性の迷路へと私たちを導く。それはちょうど、わずかな字数で事象と事象の関係を描写する俳句のようでもある。くだらない常識にとらわれていると、すべてが不合理で不可解

だ。しかし、この分からなさの不安こそが、尾崎の絵の魅力だと思おう。尾崎はモチーフの関係性について謎かけを続ける。それが力の抜けたあっさりとしたタッチで行われているのも心憎い。 服部正(兵庫県立美術館)

協力: 社会福祉法人みぬま福祉会 工房集／兵庫県立美術館学芸員 服部正

後援: 文京区(文京アカデミー推進部)



前回の『YOKOYAMA'BOX 饒舌な秘密』とはうって変わって 今回はミュージック大好きな尾崎翔悟の登場です

『YOKOYAMA'BOX』の横山涼は来廊し、「悪は正義だ」と、まるで伝説のスタンダップコメディアン、レニー・ブルースのようにしきりに口走っていましたが、ピュアな表情とは裏腹な、ちょっとしたその色悪ぶりには久し振りにシビレました。病院の中にいるような管理された日本で、このような暴言？を吐けるアーティストは何人いるでしょうか。レニー・ブルースがスラングや差別用語を吐き続けることによって、アメリカのどれだけの人種や言葉そのものが自由な権利を勝ち得たかは、簡単に言い表せるものではありませんが、それは運動というほどの生易しさではなかったことは確かなはずです。

横山のつくった、釘やネジが内側から外側へと外界に対して悪意をもって突き出させたさまを初めて見た時、これはスタンリー・キューブリックの『時計じかけのオレンジ』だなと直感しました。凄まじい暴力の連鎖の果てに行き着くところは、国家がコントロールし続けた謀略だったというお話です。

真綿でやんわりと締め上げられたように日々の生活のレールが敷かれる中、横山のつくる箱はレニー・ブルースほどの大きな旗を振ることもなく、静かに力強く奥底から絞り出されたように存在しています。それと同時に、孤独に一人で目に見えないものと戦う姿は、我々の知性という名のもとのチップケな文脈を破壊し、蘇生させてくれるエネルギーをも内包しています。

横山の箱を見たある女性は「なでなでしてやりたくりますね」とつぶやきました。そのつぶやきは母性の力や情の深さから出たものかもしれませんが、その瞬間のYOKOYAMA'BOXと女性の間には、「おもとのアート」に触れ合ったという関係性が生まれていました。

今回、がらりと変ったような尾崎翔悟の絵画展ですが、尾崎の絵からは、アウトサイダー・アートに顕著なエスキースを必要としない強い即興性を感じます。画面に多く描きこまれた楽器類と、そこに何の変哲も無いように割り込み描かれた様々なシチュエーションの図。ニューヨークの熟練されたジャズマンが旋律からブロークンしながらインプロヴィゼーションへとスムーズに移行していくように、尾崎は自分の思いのままに絵を描き続けます。

尾崎の絵も横山の箱も同じように、我々のひ弱な文脈をブロークンし、時空間を飛ばしながら異次元へと誘ってくれる不思議な魅力に充ちたものです。

そして今回 尾崎翔悟の絵画を販売いたします

尾崎翔悟の作品は、ニューヨークの現代美術ギャラリーMIYAKO YOSHINAGA art prospectsにおいて、小出由紀子キュレーションによるグループ展に出展販売されました。ジャズ好きパーティー好きのニューヨーカーにはいかにもぴったりの尾崎の絵だったでしょう。日本のジャズファンや音楽好きの方々も、美術の枠を超えてどうぞ高覧下さい。そして尾崎のファンになられた方は、ご自分のお部屋にお飾り下さい。

アール・ブリュットに熱視線

障害者アート「純粹に楽しんで」

根津・浅草橋で展覧会

「アール・ブリュット」「アウトサイダー・アート」などと呼ばれる、芸術教育を受けていない人々たちによる表現活動。活躍する作家の多くに、知的障害や精神障害がある。近年注目が高まり、展覧会が各地で開かれている。

ギャラリー「汐花」(文京区根津2丁目)で個展を開いているのは、さいたま

市の尾崎翔悟さん(23)。ダウン症の尾崎さんは、学校を卒業後、アトリエなどを併設する通所施設「川口太陽の家・工房集」(川口市)で創作活動を始めた。

出展した約20点の絵には、トランペットやバイオリンなど、様々な楽器が描かれている。家族が刺激を与えようと、子どもの頃から常に部屋で音楽を流して

いた影響だという。音楽が大好きになった尾崎さんは、カタログなどで見た楽器を細部まで表現し、今にも音楽が聞こえてきそうな「にぎやかさ」をもった作品を描くようになった。

個展を企画したのは、ギャラリーのオーナー角田光隆さん(54)。「コンテンポラリー・アール・ブリュット」と題した作品展は、今回で6回目だ。「アートや芸術の枠を突き破るパワーを持つ作品の魅力を地域でもっと発信したい」と話す。「障害者のアートを見るとき、日本ではまだ『人情』が絡んでくる。もっと

純粹にアートとして楽しむことができるようになる環境をつくりたい」

ギャラリー「マキイマサルファインアーツ」(台東区浅草橋1丁目)でも、尾崎さんと同じ施設に通う3人の作家の作品展が開かれている。

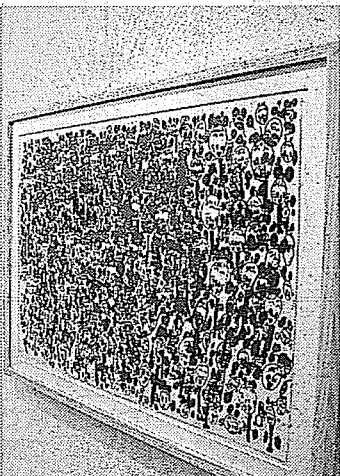
展示されている田中悠紀さん(32)の作品には、どれもたくさんの笑顔が並ぶ。施設で飼っていた犬の「茶太郎」をモチーフにしているという。

ギャラリーのマネジャー、佐藤香織さんは「勇気をくれて、純粹な気持ちにみさせてくれる作品です。みなさんにぜひ知っていただきたい」。

どちらも入場無料。「汐花」(03・5815・8280)での展示は25日まで。午前11時半〜午後6時半で月曜定休。

「マキイマサルファインアーツ」(03・3865・2211)での展示は20日まで。午前11時〜午後7時で、最終日は午後5時まで。

(松本千聖)



①尾崎翔悟さんと、ギャラリーに並んだ作品。絵は細部までこだわりがある。文京区根津2丁目
②「茶太郎」をモチーフにした田中悠紀さんの作品。台東区浅草橋1丁目